雅遊漫録

一

伊藤長七記
特7
4
332

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332

ガラス使用

特7-332

伊藤長七郎記

雅遊漫録巻之二目録

壓書（ブンチン）
錐子（キリ）
硯屏
印章
鬚鬟（メガネ）
法帖
刀子（コガタナ）
筆床筆架（フデタテ フデモタセ）
糊斗附粘板（ノリイレ ノリイタ）
印色池（インニクイレ）
貝光
几案

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332

ガラス使用

書燈　筆洗
秘閣（スミツカ）　帋簽（ツケカミ）
烏絲欄（スミケイ）　經撰
懶架（ケンタイ）　四贔
混波須（コンハス）　栞（シホリ）
歌袋　鏡子（カヽミ）
書簾

雅遊漫録巻之二目録終

雅遊漫録巻之二

壓書（ブンチン）

世に奥世よりあまく知られたる銅鐵鍮石などにて製せるあり

獸形よりは石にあらざる銅印なり和漢の製

世よりあまし書鎮とも云へく多く他よりも

刀子（コカタナ）

硯函の中に世に知るべきなんでありべし近年邦の製なる快利なる

ものなり次ものなり製いろいろあり紅毛人の製せるものの流伝

の柄（上）とし形をなせるなり又骨角にて製し中ふ撓指角

針筆等を造ることなり巧なる事甚し彫鐫製よ

小角の中と賞ちさゝやかなるを又布邦の雅を作をふくゝゑと
ちゝ〜桑をゆく柄ゑ風雅質朴山人逸士共具ちり
錐少力ゝく柄とゝ共織ゝく折のべんを雅ゝく作りしまた
あり倍ふちゝ〜ゝらくゝとも〜ゝ官家の古制衣ちりとさゝゑ人
お作せ〜ちり
海をの人ハ海苔根(アラメノカブ)ゝく柄と製あまり宮ゝゝぶ
硯箱ハ入るハゝやゝきゝ方法のゝ(り)ちゝ〜

鎖こ

ゝゝと書をゝゝぶの見ちゝんだ行るべゝゝぶゝものちり後
文房図賛ハ利通直又ハ今若山人ゝちり文房の具ハ入ゝり

筆床筆架(フデノタテ フデヒタセ)

名物方言曰筆架曰筆格筆牀(ト云)云 ハちゝ見ゝ 筆ゝて
ハ磁洞ハ小瓶或ハ筒と見ゝ筆ゝとたゝせハ古洞ハ獸形獸と見ゝて
ゝゝのちり又彼ちり船来のゝゝハ猴の硯屏ハ竅と通し
筆ゝとたつハ芝見ゝ製せゝるものあり文房図賛ハ
石のハく山ハゝゝちる自然のりハを見ゝ石架閣ゝゝハ山ゝ
源ゝゝと名けゝり此二物ハ要ハあゝ〜ゝゝもありちん色
又若書ハ筆をゝゝせてゝゝゝものゝ書見ゝゝより硯屏ゝ
しふれゝゝる硯をちゝゝゝ硯ハ筆ちゝゝゝ見ゝべし

硯屏

近年舶来スル鏡ヲ入タルモノ夜中硯斗ニ置ハ燈光映シテ硯ノ面分明ニ大ニ助アリ夜中硯池見ヘサレバ不便ナルコアリ

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332
ガラス使用

文房十友は硯筆墨紙と琴棋書画のごとく
さ今名硯銅漆髪描金のもの多し世間見て慶と遊の
ごとき要具なれども古て毛筆ばかり用ひ今
番く絶せり

糊斗 附粘板

封筒巻壁書中ふくさいとの紙と書るは必見るべく人ある
べくもぶるあるべし必そのべ〜ものべ〜
てあ〜

居家必備曰糊斗又蠟斗古人用以炙蠟緘啟銅製頗
有佳者今雖用糊當收以備數

遵生八牋曰糊斗有古銅小提自一如拳大上有提梁
索股有蓋盛糊可
又曰有哥窯方斗如斛中置一梁俱可充作糊斗
緘筒蠟を製るの法居家必用ふあるとこと今不用ものあ
ハ多の石絶法和をたるよ法を
尾盆盛水以麺一介摻水上任其浮沉夏五日冬十日
以臭為度瀝浸麪清水煎白芨半兩白礬三分去滓和
所浸麺打成濃麪入桐油黄蠟芸香等各三錢重就鍋
内打作一團別換水煮令熟去水傾置器内候冷日換
水浸臨用以湯調開

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332
ガラス使用

王梅溪集粘板、銘云千里、面目、書簡、函而封之斯致遠代、卓受垢而不辭者、是惟粘板（此銘粘ヲ托スル板ヲ云ニ非ス粘ノ使用スルヲ其下ニアテル板ナリ）

なり邦ふく粘板とて用ゐあり余もさとす幅二寸の唐板を作り粘をぬりて乾して亟用ゆるに望ゝ水漏のあるを忘れ漏く竹筒ゝくさるゝ時をゝ粘とうるに封筒紙久しく敗く不敗旅中ふたつさへ使ひ易きを簡易にして古人の良法なり

隙白用人ふ玉ありあり其粘ハ又日敗ゆゝくゝゝ

印章

印玉晶銅凍石青田石蜜蠟石燐光石等ゝく磨刻を藏書文籍畫絶法帖おの記ゝ文房中必用ゆゝ事印史印譜ホ

の書世ゝ毎ゝ手ホ法書中或を世せる印の事余等ゝ一ゝ

ゝこゝゝ書ゝゝ書ゝゝふあゝゝゝゝハ秀ゝく池せゝ

印色池（磁器ノ肉池深キモノヲ用ヘシ アサラナルモノハ肉池ノ用ニアラス）

印色池一ハ印色盆ゝゝゝゝゝゝの製造あゝゝ磁器が

ゝ一ゝゝ漆盒石函の類ハ肉厚ゝゝゝゝ印色の法又印の

書の中秀ゝく海を再ゝふ贅せゝ

鬚鍵（メカギ）

提學副使潮陽林公有二物如大錢形質薄而透明如硝子石如瑠璃色如雲母毎看文章目力昏倦不辨細書以此掩目精神不散筆畫倍明中用綾紬聯之縛于

腦後人皆不識舉以問余余曰此鬚鬕也出于西域滿
剌國或聞公得南海賈胡必是無疑矣後見張公方洲
雜錄與此正同云見宣廟賜胡宗伯物即此以金相輪
廓而衍之為柄紐制其末分則為一岐則為二如市肆
中等子匣又孫參政景章亦有一具云以良馬易得于
西域似聞其名為僾建則其二字之訛也蓋鬚鬕乃輕
雲貌如輕雲之籠日月不掩其明也若作曖睫亦可
右愼懋官花夷珎玩續考かゝくゝり眼目昏倦の人老人など
書を愛よ多養の業多りあるものの人をもとゝくゝび眼力衰
養肥く老眼目つゝゝゝゝ船来のものの沙丘みゝく製するもの

世よりあゝおのゝく殖ゝくゝ似るゝさるものハ水晶ゝく作る或
人ゝ晶の眼鏡をみ書と作ゝくゝあるゝゝ天の陰晴を試んゝく
窓とゝゝさ天ゝゝゝる日光ゝ晶ゝゝゝゝ

るゞ呉ゝ載ゝり或ハ牙と牙四賢と牙光源光遺刻し
尚たゞ委くしる名 紙とゝりく古澤〻〻〻

又曰隔板此予所獨置也冬月圍爐不能不設几席火氣上炎毎致桌面檯心為之碎裂不可預為計也當于未寒之先別設活板一塊可用可去襯于桌面之下或以繩懸或以鉤掛或于造桌之時先作機彀以待之使之待受火氣焦則別換為費不多此珍惜器具之婆心慮其暴殄天物以惜福也

世俗多有二制抽替を造る凡はさちゝ多く制して世ろゝ用ゐ脚の中ふ地替あるものハ膝つくへくあゝ御のたゝの外よ造るべきよう有ちよそ凡ハたのごゝく造るべゝ某家のゆゝく桐ゝ作り面よ嵐ゝ彩

をとゝ彩ゝ凡の面彩彩のゝみさ彩ゝめゝく粘ゝ又ゝ法ゝ一種連ゝ可ゝとゝゝゝゝ彩ゝ彩ゝゝ彩ゝゝゝ八寸御の彩ゝゝゝ圓竅あり小檔ゝゝゝゝ造ゝゝゝ

ゝゝ茶ゝとゝふゝ彩ゝ方ゝ彩ゝ方ゝ彩ゝ彩ゝゝゝ彩ゝゝ彩ゝ彩ゝ地替のゝ

ゝゝ凡ゝゝよゝ匣ゝとゝゝゝ凡ゝ百ゝ彩ゝゝゝゝゝゝ彩ゝ凡ゝゝゝ必地替凡

ゝゝゝゝゝゝゝゝ隔板の式ゝゝゝゝゝゝゝゝ日凡のゝよ小爐

罩蓋あるものと大氣滴つゝふ板をゝくゝゝ義が燈檠式

ゝゝゝゝゝゝゝゝ隔板の方ゝゝゝゝゝゝゝゝ周ゝ今ゝゝゝゝ式と

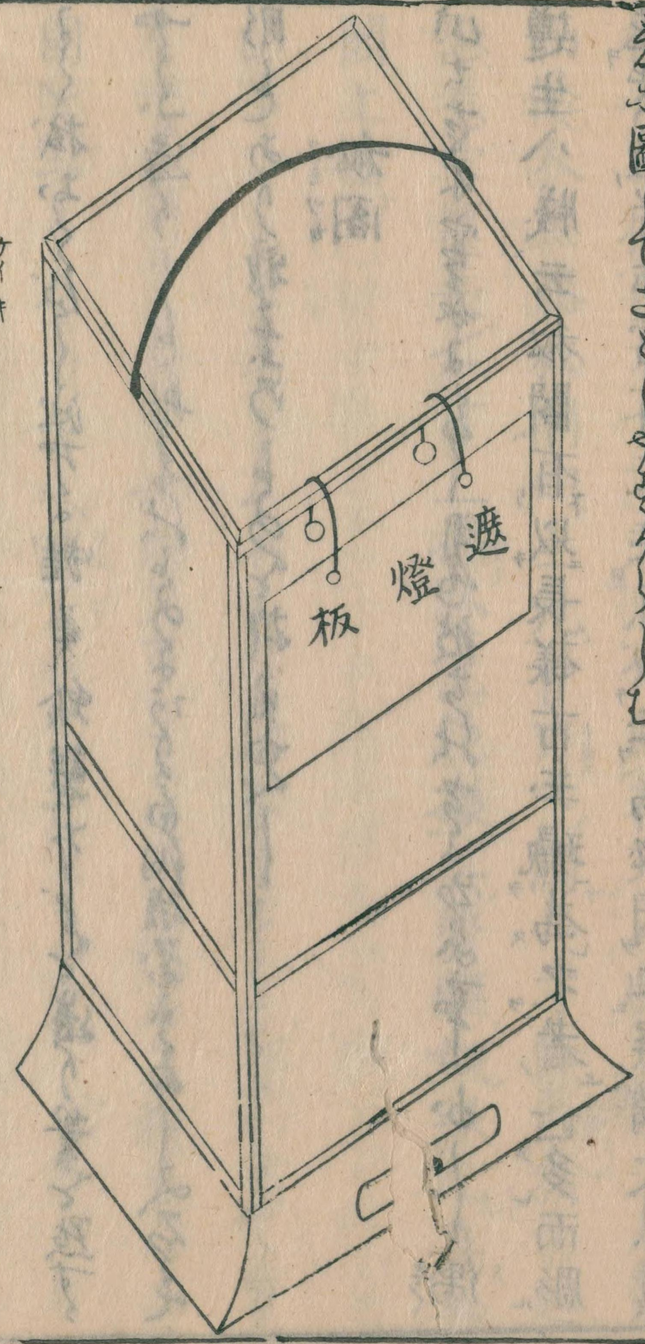
器具周樹屋ゝ書影ゝ響榻ゝゝゝゝものあり法帖ゝ孫古畫ゝゝ写

ゝゝ凡ゝ周ゝゝゝ方ゝ鏤用紙ゝ粘ゝふ地替ゝ文他燈ゝ盛ゝ入

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332
ガラス使用

こさてこ小書畫をおさえとゝり彩紙と襞て或ハ双鉤或ハ摹勒すゝ
る紙をくるまゝくるくるとさゝるものも是ゝくゝうつる今文こゝ
もゝ也ハ今撮ぐく和解を
文是源氏の法帖と尾ゝく造りてまゝ有るゝとき〻ゆ水と入
るゝ〻ゝ小造る紙法皇義ゞぬまゝくゝ玉版〻〻玉ぶべゝゝぶ
此ゝ也ハ人序して後書をゝろゝ〻ハ巻〻〻ゆく書とゝむ々
ハゝ〻ゝゆルの御をゝく造りてゝゝゝ風ゝ通ゝゝて
後ゝ可ゝり或ハゝ〻〻くゝゝ小橋をゝとすゝり
又れ西方ゝの内まさんをおれ向位の板ゝゝ〻〻迄書とゝく
考ゝ付ゝゝ〻〻〻

は製既よ其方りあり板をいく上接下長く造り三方圓敷（一ハスカレ）
ありあるひくさ弓をふ枡めさの竅あり世ふちくしまを
彩筆ととものを足方り余彩よ良法と炭彩燈大小方圓とをく炭
燈大のお遮燈板（シャトウハン）をまふくを剣筆硯寸半竪寸半の彩板を造
ふ其方ふ一又二三すれ絲と分くく絲の彩りふ一筆寸半の筆
と分ふとあんぐくのこの筆本よおり分提昂（アゲザケ）言る彩くよりこの
ぐんよ燈火とさくこりぐさふ火とあ見方ふり皮ととりく書
面と竪尺一よ八月と巻ちさよ火とえんぐとハし二まと尺ふあ
ふ尺大ふ絲して沖と耗（ハラ）ぐこりは沖燈眼よるくぐ四ふハえ
ふる池ぐと点ふ書沖竪（ブ）ぐ光的ふの彩りと彩る抄寸徳と



ふ圖してさくくやちくくくしむ
まと一名繼晷（ケイキ）板ちこと韓退之燒膏油繼晷とふる
ちとり
筆洗（フデアラヒ）

を刻ふくあり梅花等形。菊を瓣、波。弥盃波。梅花波。蓼瓣、波。
たる屠赤水の墨を筆ふくくるり又筆地ともちるり筆をと
くに波ハさ山を濃墨濃く毫おを摸ぬかつ先とそくぎ紙
ふく拭おくぐ池中を蛙奥蛤蟹ちどを遊り筆と跡すう
ふ造りしを船を先をのようりり白泥墨をよ〜〜みるて
彫をあり雅を乃ものを撰見ぐ〜

秘閣

山古来官家よ多く用ひ彼ちれをよるふ事かし偶
遵生八牋云秘閣有以長様古玉瓏為之者甚多而彫
花紫檀者亦常有之近有以玉為秘閣上碾螭文臥蠶

梅花等様長六七寸者以竹彫花巧人物為之者亦佳
而倭人黒漆秘閣如圭元首方下濶二寸餘肚稍虚起
恐惹字墨長七寸上描金泥花様其質軽如紙此為秘
閣上品

山古来官家よ多く用ひ彼ちれをよるふ事かし偶
遵生八牋云秘閣有以長様古玉瓏為之者甚多而彫
花紫檀者亦常有之近有以玉為秘閣上碾螭文臥蠶
図を写くちるしむ又鍵尾ぞ云

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332
ガラス使用

紙簽

朱子語類曰當時亦不暇寫出只逐段以紙簽簽之

按紙貼ってとうく俗ニ不審紙ともいふ書中考へこれをおもてに書出し紙簽を用ひ行ふ所同じ故べし此ニ良

按紙の背ニ紙の背ニ為さ物を記さ乾て後幅一分許ニ裁ち

とづけ亟又為ニ捩ニ頸ニ錐こよりと通て金ニ

く為板の小牌を付るが可ニ用ニ敷矣ぜひ求ふべし

背ニ為物あるバ書く後ぐりまきて良法なり

烏絲欄

此ニ書く界ニ紙ニ朱絲欄ニ烏絲欄を

ちら界ありまた書を写ニ界を襯して

按小抄書ぬむ人そのまくんでありしじ刻板にして用ひ

仮ちり近来ニ界と云刻あり摺墨版のごとく下拔くと

廣く界をもり亟彩ニ界を作る時細を要せざ本を用ひふと

きと要せざ書と用ひ是文字を画ると界を捷法なり

李肇國史補曰宋亳間紙有織成界道謂之烏絲欄と

ゝくゝり

經橈　書籍ヲ看ルニ紙ヲ翻ス為ノ器ニ手ニテ反ヒ手澤ニ汚レシヲ悪テ書ヲ愛スル人必ス備ヘシ象牙或ハ竹ニテ造ル

藝文類聚曰後漢李尤經橈銘曰瞻之在前忽焉在後

進新習故不舍於口子在川上逝者如斯及年廣學無

問不知

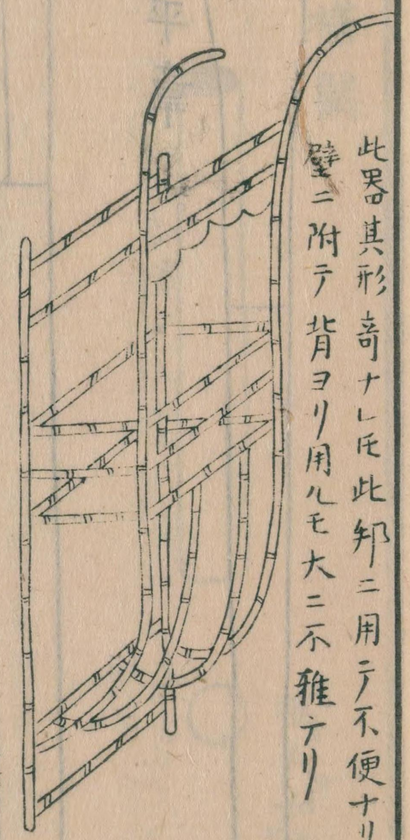
本邦官家ハ用ゆる本筆ばかりにて條頭紫あり官位のうへ下ハ紫黄濃淡の差あり源氏物語ハ紫ばかりにて其ほかハ黄ばかりにて家賓職ばかりハ用ゆ

懶架（ラン カ）書ヲサシヨクノ名ニ魏武ノ造ル物其制知ヘカラズ但臥テ書ヲ見ノ用ニ非ズハ漢人ニ用ヒキ器ナリ

三才圖會云懶架陸法言切韻曰曹公作敧架（ヲ メ ル ヲ）臥視書今懶架即其制也則是此器起自魏武帝也

研北雑志曹公作敧案（ヲ メ ラ ノ）臥視（ル ヲ）書周美成又謂之倚書床（ト）此説如の拙ハ去ル頃る書ハ書ハ臥てハ見るハ低きゆゑ用ヘ

嬾架圖



此器其形奇ナレ𪜈此邦ニ用テ不便ナリ前ノ文ノ壁ニ附テ背ヨリ用ルモ大ニ不雅ナリ

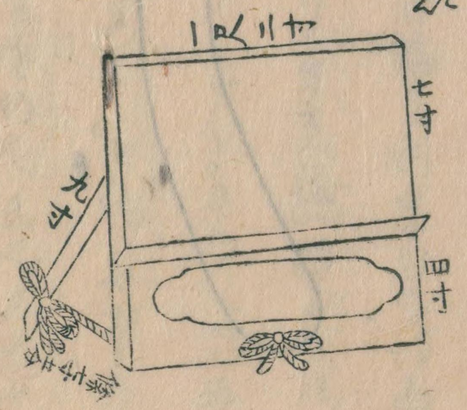
續文房圖賛ハ言ハ圖学ハ言ハ筒牘を書ハ臥ての役ハ

此邦の玄架（シヨ タナ）ハ言ハ

○臥てハ見るけんぶん

今ハ去ハ用ゆる役ハ見ハ新式ハ言ハ

新制嬾架圖

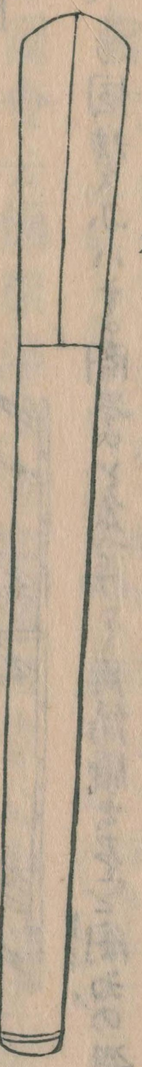


国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332
ガラス使用

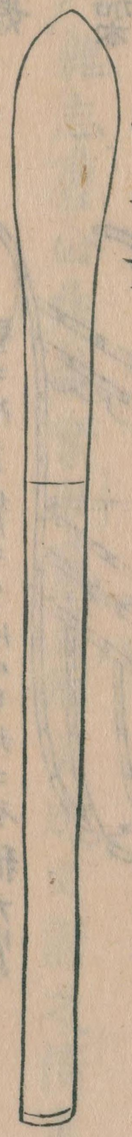
四賢

劉司空

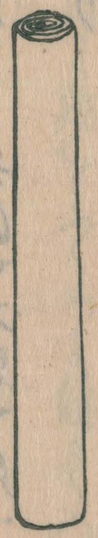
牙光禄



温平章



胡補闕



徑大サ如此、

此四賢ハ素ヨリ其人ニ家ノ如ク其ヲ具ヲ作ル図ヲ摸シ劉司空ハ得リ字ヲ削ヲ去ノ具用若編ヲ刮字刀ノ法ア

ルベシ温平章ハ其具アリトイヘドモ牙光禄ハ始メヨリ其ノ具ヲ作ル図ヲ摸シ胡補闕ハ紙ヲ数ヲ折リ巻ヲ

貝光禄ノ巻法ヨリ刮去ノ法アリ

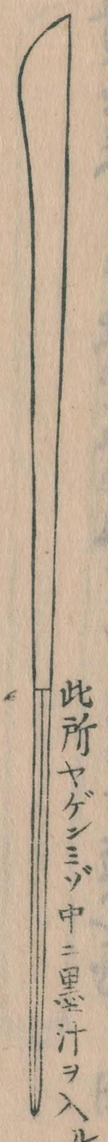
章ハ瑜石ヲ以テ作ル其ヲ作ル図ヲ摸シ温平

胡補闕ハ紙ヲ数ヲ折リ巻ヲ乾具ヲ作リ

刷しるあるは毛ぐらかるを小口てあらへ洗るの具なり是は
稀文房図賛ゴ宮名を施せり生て宮名を施せるもあるべし

混波須（コンハス）

是ハ紙毛図より作へし是より墨鬼とりゴ甚便なり
上ハ白鬼（シラケイ）をりふゝ美ゴ図を著ス



鐵ゝゝく歯ゝゝゴ長けを入鬼をとりふゝゝさらゴんゴ流を敷る
ゝゝ（タクミ）ゝゝ具なり

栞（シホリ）

此具ハ本邦の制大さ短冊ゝ印ゝ彩ゴ雅（キリモミ）ゝゝ白ゝの條（ヒモ）を左（ヒダリナヒ）仕
ゝゝて外ゴ厚ゴ紙ゴ箔をゝくゝゴ編ゝゝ書をゝ浸ゝゝく柔ゝ
ゝゝをゝゝる折鬼（ヨリレハ）を外ゴハ表ゝゝれつゝ表むゝゝく是を用ゝべし
或ゝ寿をゝく

吉野山去年の枝ゝ折れあとゝくまぞゝゝ方の花をゝゝん

ゝゝ寄をゝくゝゝ皮ゝゝゝ出るゝゝゝ

書簾（シヨレン）

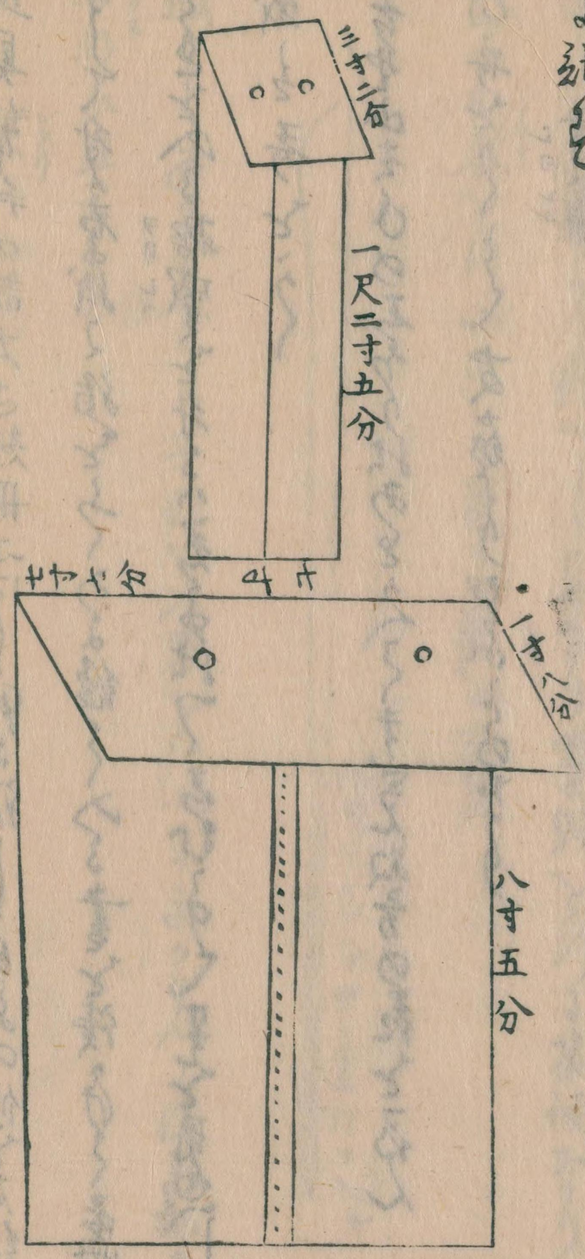
麥稈（ムキハラ）をゝく簾のゝゝく糸をゝく編ゝゝゝ外ゝ幅九寸外ゝ
作るゝゝゝ麻を脇を安ゝ久ゝくゝゝゝ麻ゝゝゝ
ゝ麻ゝゝゝゝゝゝ余ハつゝふゝ縫（ヒトヘ）ゝ用ゝ

肱と安とを手にて托腰と云小褥と中あつ綿と入る方左すと

歌袋

こと此たの創宮部より出るを寸法二種ありて作り今後

よ続とて



右の袋紙又八白紙のあやまくに作るまんなるまつぐさめあり此まるる

顕の奇をとらるづらふ時や性のうるるる

不知

鏡子

時珍曰鏡乃金水之精内明外暗古鏡如古劍若有神明故能辟邪魅忤惡凡人家宜懸大鏡可辟邪魅劉根傳云人思形狀可以長生用九寸明鏡照面熟視令自識已身形久則身神不散疾患不入葛洪抱朴子云萬物之老者其精悉能託人形惑人唯不能易鏡中眞形故道士入山以明鏡徑九寸以上者背之則邪魅不敢近自見其形必反却走轉云云

後の邪気を辟るす傳籍の載るを聚めて今之人雅士文

房中の一玩とかたれも故あり北園書院僧ものも続ものとくるを事世俗有るより或云事燈下小徒と重ゝ大の光をうつせば灰中を照して墨北涉波とくるの風とありとゝふ今世俗考べ——

雅遊漫録卷之二終

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332
ガラス使用

雅遊漫録卷之三目録

避泰（ヲイ）　方便嚢
詩嚢　千里鏡（トヲメガネ）
途利（ハツトク）　逍遥座（タヽミレヤウキ）
行厨（ベントウ）　旅行雑具
香茶酒具　花尊（ハナイレ）　古景盤
菖蒲盆（セキセウハチ）　烏有先生集

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332　ガラス使用

没字碑　無塵子
竺祕閣（イトナキコト）　如意　塵尾（ホッス）
扇（附扇墜）　料絲屏　方枕
菊枕　尺（モノサレ）　裱軸（カケモノ）
畫叉（カケモノカケ）　打枝　砧枕
焚掛（タキカケ）　水石供

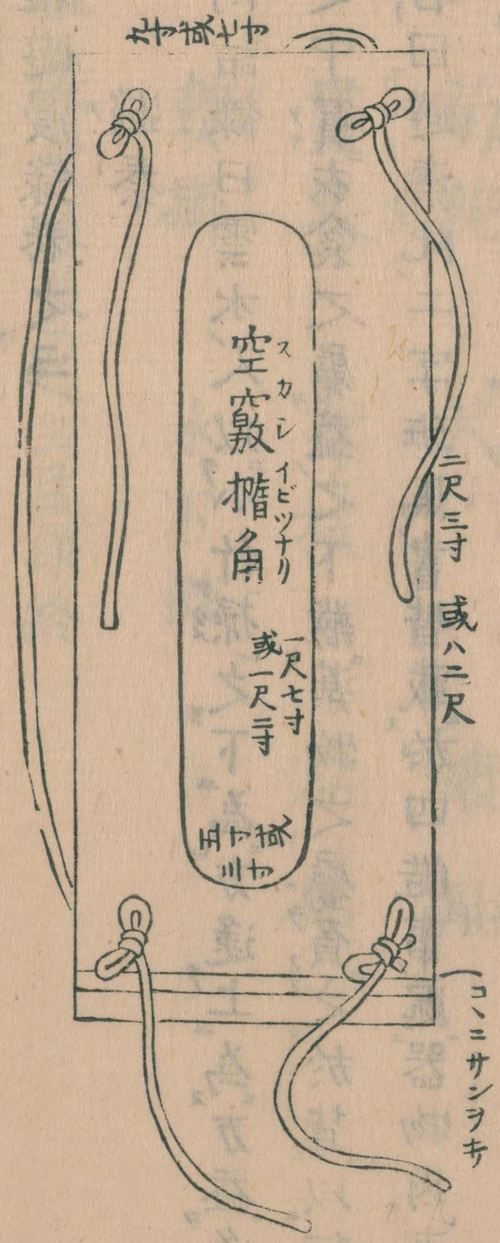
雅遊漫錄卷之三目錄終

避秦（ヲイ）

因話錄曰雲水人以小竹撩之下為方逐上為方葢逐之中寘衣衾之屬葢之下藏藥物之屬負之於背以行名曰避秦此二字班馬書皆載於四皓事處器物因事以名其源流有如此者

見八世之回國此人負背笈の類なり人家つゝふゝさ笈を制しる亟ゝ寄ゝ澄（テガタ）秀秘書の類と紙屋れたの弘の時ゝ人各自ふ負て避ゝしゝとゝ〻ゝ大ゝ亟の弟ゝ子ゝ仕利ゝく手ゝ為ゝよゝこゝ亟ゝと制ゝく傍ゝゝ亟ゝくゝゝで諸ゝのゝそゝ人ゝのゝゝゝあゝゝゝ

行列の人ハ髪切(カウギリ)をとゝのゆ侯(エン)小角の負ゝみ笈あり
ことゝ一枝の枝をたゝのゝ長ゝくる條(ヒモ)と長ゝ世枝と負ゝく枝ゝ
元百の把と條ゝ結(ユイ)付るゆゝるゆゝるものゝ有りと古来質朴の
風さとあゝゝゝ條の手把ゝくこゝぶりゝゝかれゝゝあゝゝ
を今又新式を図をゝ長ふゝれり



ゝるの方ハ長ゝるゝ付たのゝをとゝのゝるゝり背の條ハ把を結付る
白桐(キリノ)素木(シラキ)ゝゝ造る

方便嚢

清異録曰唐季(トキ)王侯競(コヽヲ)作(ル)方便嚢重錦(ヲ)為(ツクル)之形如今之
照袋毎(コトニ)出行雑置(ス)衣巾篦鑑香薬詞冊(ヲ)頗(ル)為(リ)簡快
此制俗俗の三衣袋ゝゝゝゝ数ゝゝり独行ゝ人(タツサヘ)独乃ゝゝ素
可ゝゝ只ゝを弱ゝ張ゝ付ゝゝ絲ゝ一ゝゝゝゝゝ遊ゝゝゝ山ゝゝと賞
ゝゝゝゝゝ拭ゝゝ把を矢陽(ウレナヒヲトス)土の憲ゝゝゝ困人のおよハ逸(スグレタルモノ)ゝゝ
況や被ゝゝてハ侯もこゝを拭乃ゝゝや

詩嚢

唐書曰李賀工詩章毎日出騎款段馬從小奚奴背古錦囊遇所得納囊中云云

此俗語瓢箪の制歟ちなんくらり平ぐ支那にも囊と有ることを始て知る冊子硯を納くる所を賀ぐあることを追て云ふ

那之衣袋のごとくして小高き物なれどさあべし畢竟方便囊と呼べきもの也ちなみに又ひさの制に袋あり既に二の考ふ

千里鏡

正字通云今西洋國千里鏡磨玻璃所成者以長筒窺之見數千里復制小者于扇角近視者能使之遠

山泉書堂の地に遊ぶ勢くハ甚奥ふ舶来元寅の制世に

制ちなみに地ふ孔美西あり撰べし北虜が繒地の術とりくさ欲ふ巧なり奥ちりあつ造ちんなり脚を造ものをくくるの西の西

こ法のくくあつ造ざとどもあるべくあ元の制

ちふものなちり

途利

洞天清録曰途利小文具匣一以紫檀為之内藏小裁刀錐子穿耳挑牙消息修指甲刀剔指剔指髪刷銀子等件旅途利用似不可少

世奥此ちふ剔ちふ八徳ちふものなくくこ所ふ壓又抽屜の條に

辯ぐくく

逍遥座

胡床施轉関以交足穿便條以容坐轉縮須臾重不數行相傳明皇行幸頻多從臣或待詔野頓扈駕登山不能跂立欲息則無以寄身遂創意如此當時稱逍遥座

又ハ猿楽ハ鼓を手人の弄るものをいう

行厨

行厨春撞携盒提盒山遊提合食罹多の字新籍の中多く載せ酒食を納る山川に携ふ用ゆ彼方の制ハ立て用ふ後ハ世と多く用ゆ世と共に行くべしの字

又多く世に行ハ世と共に行くべしの字

書く食器なりと人丸ハ或書籍或ハ表紙の名ハ状ハ

又俗なりとしるべしとも可なり

杖

老人の歩行を助く七年の人とも嶮山ハ登り坂道ハ助とする竹藜木の三つの日なり

右人の杖も多く山房十友潘ハ老友と号て或ハ技者

なりと云

旅行雑具

旅行の時多遺の憂なきとしんがおもふ安の地とふ他

籾を人よりとく場減あるべし

衣帯　浴衣　手巾　頭巾　包袱　襪　護膝　枕

紙鋪　雨具　笠褥　傘　笠　草鞋　金銀

銭　鑷　提秤　裁刀　櫛笥　櫛　蠟油　剪刀　捻紙　鏡　髪剃刀

紙　連綴紙　巾箱本　途利　硯匣　藥籠　丸散　冊茱　萸茱袋　艾

乾姜　火刀　火引　火草　手燭　今三徳とも此とその制を甚便とす

摺畳燈　此古制也彼方　扇　椀　茶碗　茶注　浄巾

食盒　箸匕

茶　円袋　白梅　松魚乾巴　乾魚　熬胡麻

辣茄味醤　醤者火豆　砂糖　寒具　番椒粉

人家を求る原山あるを弱くて旅中なるもまたまたもあるべし

不飢法　麝　三十錢　石蜜　十五錢　人参　三分

右各細末にして水にとく或恵水にとく飲べしまたは湯にとる法あり

大鹽梅　去皮去核　七十顆　黒砂糖　百錢　人参　三分

右各搗り合せ冊茱のごとくにして貯置くべし朝毎に湯にとる

遠路行の人　草烏頭　細辛　防風　各等分にして草鞋

をあらかじめ此薬をとりて塗べし

牛程蹉ゝは番椒粉飯ゝまぜ生ぐ〳〵又嵌甲瘡ゝ
兎の毫を生ずゝ

香具　茶具　酒器

香具八雅客の玩ぶ所也茶具酒器ゝ世に行る世中ゝ多し因
ゝ器ゝ茶具酒器ゝ付て後編ゝあり

花尊

瓶史曰養瓶亦須精良譬如玉環飛燕不可置之茅茨
又如嵇阮賀李不可請之酒食店中當見江南人家所
藏舊觚青翠入冥砂斑埜起可謂花之金屋其次官哥
象定等窑細媚滋潤皆花神之精舍也大抵齋瓶宜矮
而小銅器如花觚銅觶尊罍方漢壺素溫壺匾壺窑器
如紙槌鵞頸茄袋花尊花囊著草蒲槌皆須形製短小
者方入清供不然與家堂香火何異雖舊亦俗也然花
形自有大小如牡丹芍藥蓮花形質既大不在此限嘗
聞古銅器入土年久受土氣深用以養花花色鮮明如
枝頭開速而謝遲就瓶結實陶器亦然故知瓶之寶古
者非獨以玩然寒酸之士無從致此但宜成等窑磁瓶
各一二枚亦可為乞児暴富也冬花宜用錫管北地天
寒凍水能裂銅不獨磁也水中投硫黄數錢亦得
山齋志曰壁間當可虜懸壁瓶一

墨莊漫録ニ曰竹筒簪花フ

西湖志餘ニ曰禁中賞花ヲ至テ於梁棟牖戶ノ間ニ亦以湘筒貯ヘ花鱗次ニ簇挿ス

彼方ともうけむせ竹の花生あるとうくくうりを去ハ必禍汨と不求竹と可と質ふまして雅なり袁氏が海ぐくむ瓶ハ花の座舍あるて雅なるものと擬むべし

白景盤（センケイバン）

清異録ニ曰郭江州有巧思多創物見遺白景盤銅為之花蓐平底深四寸許底上出細筒殆數十毎用時滿添清水擇繁花挿筒中可留十餘日不衰

はた古来世創あり東山殿御清潔なる云双花瓶花伝志ニ曰小筒を以一圓もあり俗書ニは茅むし瓶と茅むしの〻挿の具ニて本のむハいけざるこ〻ろ大今海鼠（ハナフカ）盤とこの世造創ありまを以く黒り漆よくぬりこ〻ろあんどうのごとくの紙こ〻ろ白器（ドウサ）とり〻霞（ヲイ）あり花ハ慶埃こ〻らば北良法ちり中ニは油をへまをあをひこ〻むをとこ〻ゆくるべき花細筒と可とよし

石竹瓢数ちこ〻

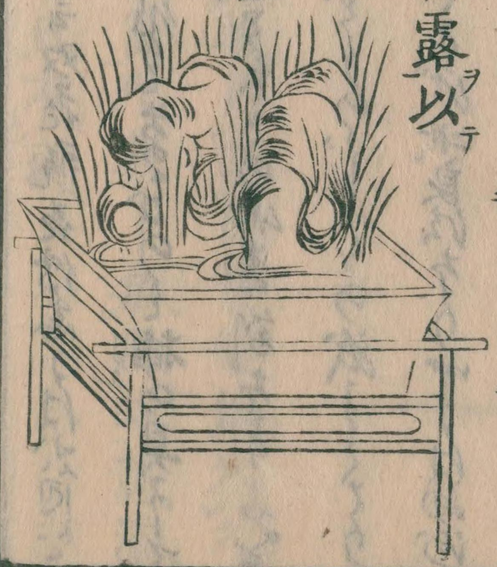
菖蒲盆（セキセウハチ）

養老新書曰怪石奇峯以（ノテ）沙石器種之且暮易水則茂水濁及有泥滓則萎一寸九節者服之可以烏髭輕身

延年夜燎燈間置一兩盆可以收烟不薫人眼東坡詩
曰碧玉椀盛紅瑪瑙青盆水養石菖蒲曾茶山詩云窻
明几淨室空虛盡道幽人一事無莫道幽人無一事汲
泉承露養菖蒲文石清澗斯亦几案間良翫也
游官紀聞曰呂微仲便坐有昌陽盆蓊緑毛龜
遵生八牋曰置蒲石于上收朝露以
清目

介石高士銘

一介不與一介不取確乎弗拔矻乎砥柱靜室高齋山立
揚休有蒲與荷冷然俱秋



漢文房圖贊云圖之介石高士云云有板云云盆
の下ふちぬきより圖のごとく架よ高しが清冷こうて文房
石菖蒲と養決云春遲出春分方出夏不惜用竹剪去葉秋水深深水
養之冬藏密須藏密室又忌訣云添水不換水見天不見日宜
剪不宜分浸根不浸葉其法盡之矣
予そのごと菖蒲を表ふ移をハ肩しゐのこと移をハ汚爛
〳〵不保ところ〳〵の法不合ゐをあやまむ移るよ法義元氣の
古老予は教〳〵云菖蒲を水〳〵ゝ表ハ三年ゝて成るゝめ多
く根を洗〳〵つゝゐと浸ゝふ毎日夜ロハ三ゝ水をゝ入ゝハ一
二日よ一ゝ水ゝ入ゝ系枯根〳〵ゝ系ゝものと日ゝよゝ去ゝ〳〵ゝ

その水ふかく育をそのの活根固く系細くちぢまれ水ふつもりを
く活業は繁茂してをれ年々養しものハ便たのふ菖
蒲は十倍をと予こをと浮く養はを云のごとくあとをたび世法業
一の良法今を活く世上は公れん

烏有先生集

笠翁一家言曰烏有先生集余新制一筍外作縹簡一冊上
之形啓而視之則空空如也凡案頭需用之物如箋簡
筆墨圖章之屬悉貯其中因以烏有先生命名道其不
實也有銘畧之

此筍を造りれ案は倩を至く凡百の具を紙べ一行ぞ抽替凡を入れ

没字碑

即前烏有集同物而異其名形亦小異彼省書本此類
法帖有銘畧之

此筍を造りれ案は倩を至く凡百の具を紙べ一行ぞ抽替凡を入れ

無塵子

雲仙雜記曰方鎔隠天門山以櫻槲葉拂書号曰無塵
子月以酒脯祭之

又案紀及文房纂図賛は櫻將軍勇退老夫の号あり櫻槲
葉ふ拂ふ皮を用ひ世古ふり法具あり書を拂
をれく祭ふハ戯のく賈嶋系法を祭と同日の戯ふり余の友某

歳末賈鴉よるくひて庭中の吟徐と称して自ら洒と称して称する
又天の清酒徳利の白き色八賈氏ふまるる事と見て絵画と
世云茶を家鳥羽をとる帚とする雅なる事櫻帚よ猶る或を
孔雀金雞の好羽と添くらさる又雅趣と思く

竺祕閣

陶元亮蓄素琴無絃玩其質而遺其声蓋形声雨忘矣
出寓簡

琴八文房中の清玩なり一五の者よ委ね再絃を施をあす一世
絃玩質家左祖ハ声形雨ちがら高くい釋老の膚談合味
あるがらるるく行ん

如意

王梅溪集云不求人一名如意牙為指爪木為身撓痒工夫
似有神

釋氏要覧云梵名阿那律秦言如意指歸云古之爪杖
也用以搔抓如人之意故曰如意

齊垣榮祖傳曰高帝以鐵為書鎮如意甚壯大以備不
虞

徐氏筆精云南齋僧紹隱勞山詔徵不就賜竹根如意
笋籜冠隱者以為榮

如意の頭八痒を搔よ必る或八木或ハ鐵或八竹ニて作る

余識如きあり趙南塘の後漢書に云くしく云雲は俗へんこと
宜しく痒くなくは人を驚るに所作の巧なるあらく
こと止む呉蕃龍こうくして身の裏まして風搖世之の俗
俗見ふ人のなるものを拔く只容貌と刷ふ事の虚器多し
終に肥痒的搔背の名空しく

麈尾（ホッて）

古麈尾を作る用く毒名と称する蠅を拂ふと云釋籍の中
多くのなる所なりを用ひ蠅を拂ひ麈を拂ふ止る俗俗毛の長
を拔ると雅なる事ハ雅なるもの見ふ搖ハ毛短く柄長きもの
宜しく世古蜀雅の尾なる作るものあり用ひく蠅を拂ふ

麈を拂ふ毛を作るものなり
通鑑宋紀曰高祖所居陰室壁上挂葛燈籠麻蠅拂
今世の雅士樓桐皮を作る雅素を拂ふものなり

扇（附扇墜）

古ハ團扇（ウチハ）のみ有て摺疊扇（タヽミアフギ）なし唐書中に多く
載せり其多く用ひ紙を拔ると障（サヘ）て蠅を拂ふ老人ハ多くお
唐人ハ扇を拔くこと多ふ尚り蕭蓼（ホキセン）の扇（ビロウチハ）の
世に多く制する所とつくして世に多あるなり今多く此扇
清雅なり

扇墜（センツイ　タヽミアフギ　ヲモリ）ハ摺疊扇の懸錘なり石木金玉多く彫（キザ）むものを用ひ

腰扇失さるれば患をなすこと

行厨集曰扇墜玉者曰玉墜珀者曰珀墜用幾枚こと始

宋より起ると五雑組よりえらり　京師合香為之者暑

月以辟臭穢云云　五雑組

料絲屏

料絲燈屏風出雲南金齒衛用瑪瑙紫石英諸藥搗為

屑煮爛為粉用北方天花菜點凝成膏乃縱横織如絹

匂薄上繪畫也　華夷珍玩考

こまとは文房の煥彩なれども寒士の招かあらば案友

素の家世屏あり背面より織成猶ほ中より白絹より彩畫とう

さらく校なる物素のこと此なり清牧ろうる始こり

方枕

癸辛雑識曰余習懶成癖毎遇暑晝必須偃息客有嘲

孝先者輒哦此以自解然毎苦枕熱展轉數四後見前

輩言荊公嗜睡夏月常用方枕或問何意公云睡久氣

蒸枕熱則轉一方冷處此非眞知睡味未易語此也

菊枕

花史曰□英嘗種菊數畝秋日採花蘂枕日幽人枕

菊枕八月とれば頭痛を治すと云芳芳千夜夢風雨一囊

秋と笠翁の詩ふ作ちもしるく

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332　ガラス使用

陸ゝり臘仙神隠薬枕ゝ方あり秘ども尚人枕のゝさふハ
ゝう〳〵

尺（モノサシ）

尺ハゝぐゝく〳〵ばあゝぐゝ此ゝ尺の中央ゝゝぞゝ彫（ホリケ）果ゝり
ゝ明世ゝひけいゝゝ尺ハ古今和漢ゝゝ数十あり余り泉谷所
多ゝ考へ合ゝ今世ゝ用ゝ金尺ゝゝのハ唐尺ゝり考ゝ通
用〳〵ゝゝゝ明世べし

裱軸（カケモノ）

此ゝゝ掛（カケ）ゝり書畫の類ゝ裱褙（ヒヤウク）して障子ふすま襖
を即く書畫の楽ゝ有ゝの世ゝ創世ゝゝ〳〵

眞幅（タテモノ）・横披（ヨコモノ）・罩（イチヤウ）・條（ツイ）・對軸（カミヒヤウク）・紙裱（キヌヒヤウク）・絹裱（リン）・輪裱（ホ）・裱背（ヒヤウガ）・裱補背（ヒヤウガ）・名の表紙ゝ
ふゝゝゝ表紙ゝ法名ゝ表ゝ〳〵又ゝ和表具ゝゝゝのあり表ゝ
ゝ明ゝゝゝのゝり余ゝ文ゝゝゝゝゝゝ大切ゝ事ゝゝハゝぐゝ
ゝくゝふゝ〳〵ゝ秘ゝ秘冊の中ふ作〳〵ゝ作ゝ

畫叉（カケモノカケ）

或ハ叉竿（サカンガツサ）軸杖ゝ掛軸（ケイチク）ゝゝ書ゝゝりゝみ和ゝ所ハ世和ゝくんで
ゝゝゝゝゝゝゝ必ゝゝゝゝゝ〳〵

打枝（ウチエダ）

ゝゝハ歴書の類ゝり張ゝゝく橋の枝ゝゝと遠ゝゝ考ゝ人ゝり
呉作ゝゝゝゝゝの時ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

く往昔の時[illegible]事ありと雖ハ不知[illegible]

砧杵

[illegible]も此[illegible]の制なり絹を考くに[illegible]の[illegible]く作り中の絹まく所ふるとまくさ絹ときせ杵[illegible]日あ[illegible]まるの時ハぐるくと冷さ[illegible]まりさんうあるり方杵のさふ用[illegible]も雅物なり

焚掛

[illegible]も此[illegible]の制仕なり[illegible]ふ作り[illegible]をあけく中ふ引[illegible]

[illegible]と秀[illegible]と入[illegible]と秀と焚く[illegible]焚[illegible]ある[illegible]臭なり世名と拓とする

なり[illegible]家[illegible]鄰[illegible]く雅趣[illegible]し世ふ[illegible]く方[illegible]く[illegible]

[illegible]

打枝追考

著聞集云流のをしさふむのさつさ張のさらに金杯を[illegible]

[illegible]と[illegible]り[illegible]と云く弔張の皿に張の[illegible]ちるとの也

[illegible]ハ者[illegible]

水石供

徐獻忠水品曰暑中取浄子石墨盆盂以清泉養之此齋閣中天然妙相也能清暑長目力東坡有怪石供此殆泉石供也仮のごとく清[illegible]彩文[illegible]

坐[illegible]の清欲[illegible]べし雅趣[illegible]

特7
1
332

雅遊漫録卷之三終

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』　請求記号 特7-332
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雅遊漫録』 請求記号 特7-332
ガラス使用